



ヘロシナカメラ 《六甲KAOHAMEトライアングル2022》

1

1人用〜3人用まで3タイプの顔はめパネルを制作しました。
中央で回転し愛想を振りまいているのは、オリジナルキャラクターの六甲坊やです。
アトラクションのようなワクワク楽しい作品を目指しました。
是非、顔をはめて記念撮影を楽しんでもらえたら嬉しいです。



六甲ケーブル（六甲ケーブル下駅・山上駅）



岩城和哉+東京電機大学岩城研究室 《影のかたりべ_六甲》

2

木材で組んだ格子状の空間
木材は角度を変えながら接合され有機的な曲面をかたちづくる
太陽は空間内部に影を描く
影は時間の経過とともに絶えず姿を変える



兵庫県立六甲山ビジターセンター（記念碑台）



名村可奈子 《山頂の遊具》

3

何かと規制の多い世界の中で改めて「遊び」について考えました。なかでも「遊び」のルールといった、あらかじめ決められた要素とそれに対して自分で選べる要素、その二つの関係性に興味があります。
元々は「公園での遊び方」というドローイングに表れた三つの抽象的なモチーフをいかにして山頂に存在させるか。山頂という固有な環境の法則を理解した上で、いかにして自分の尺度に基づいた表現をするのか、が課題となりました。



兵庫県立六甲山ビジターセンター（記念碑台）



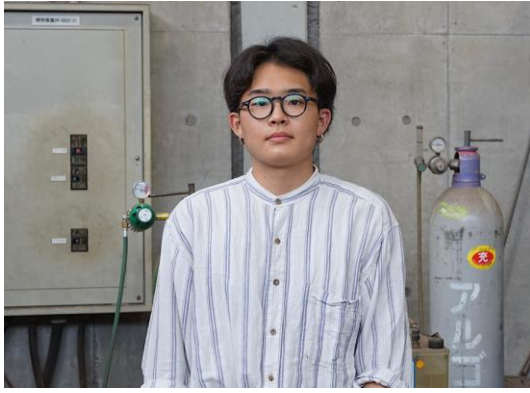
横山裕一 《ネオ万葉》

4

約8年前某有名漫画誌の要請で下描き約30Pを試作したが採用に至らずその後放置していた漫画を3年前からページを増やし再制作今年完成した最新作がこのネオ万葉である全241Pだが本展ではその一部を使用している画面内の詩歌はむろん私が詠んだものでなく万葉集他古典歌集から選びこれを原作に漫画化しているが詩の内容を厳密に再現した話かということそうでもなくまた現代語訳は私が書いたものでこれも学術的に正統な訳文ではありません。



六甲山サイレンスリゾート



伊藤大寛 《ナイトミュージアム》

5

美術館や博物館から抜け出して人目のつかない森で生き生き、のびのび生活している作品達。
僕たちが美術館や博物館で展示物を見て、解説文を読んで理解しているつもりかもしれないが、展示物にとっては自分の持つ一面でしかないのかもしれない。
普段はカッコいいポーズをとっている作品達も気の抜けた姿を晒している。
抜け出した作品達を見つけて新たな一面を写真に収めよう！



ROKKO森の音ミュージアム



Videokaffe with C.A.P. 《Fungi Luciferin》

6

これは、空から落ちて池に刺さった車の半分。そこには金属と木が合体したキノコが生える。池の畔の小さなキノコは、音楽的な囁きで人々を誘う。もしあなたがキノコに近づいて話しかければ、光を発して応えるだろう。
人間はバイオマスの一部に過ぎないが、菌類は地球上のほとんどの場所に生育し、相互に関連した生命ネットワークを形成している。森と深いつながりを持つ文化では、キノコは再生と活性化のシンボルであり特別な意義を持つ。ビデオカフェは残滓からの再生のシンボルとしてこの作品を制作し、CAP. は制作を全面的にサポートした。



ROKKO森の音ミュージアム



はやしだちか 《記憶の断片》

7

六甲は自然豊かで時間によって印象が変わる景色が心に残っており、来るたび思い出します。
今回はその時の感覚や思い出を散りばめ繋ぎ合わせるように描きました。
記憶は忘れていく事もあれば、ふいに思い出す事もあります。
今日の出来事も大切な記憶の一部になれば嬉しいです。



ROKKO森の音ミュージアム



三木祐子 + 金崎亮太studioART MANAGEMENT 《Study.RMA_0002》 《Study.RMA_0003》 《Study.RMA_0004》 《Study.RMA_0005》

8,11

私たちは特定のメッセージや、思想を伝えるための芸術作品ではなく、純粋に「聴覚芸術とは何か？」を探究しており、その探究の過程の中に生まれた習作シリーズを発表します。本作品は自然豊かな環境における様々な音と、ピアノ音と電子音響音の関係において立ち顕れる、聴覚的芸術現象作品です。非連続的かつ偶発的な自然環境音、12の音に整列されたピアノ音、アルゴリズムで計算された電子音響音、その響きに耳を委ねてください。



ROKKO森の音ミュージアム



袴田京太郎 《闘う女の子と中国の文官》 《考える女の子と倒れた墓碑》

9

今回制作した2点の作品のひとつは、太古の中国の王の墓に王と共に埋葬された「陶俑」を引用した身体に、まったく別の時代に勇敢に闘った女の子の頭部を合体させた。もう1点は倒壊した墓碑の端に、深く思考する女の子の頭部を配した。すでに役割を終え抜け殻になった白い死のイメージ、ケミカルな異物としての女の子の頭部は、死と再生を繰り返すこの森で答えのない「違和」を持続させる。



ROKKO森の音ミュージアム



村山大明 《アセビの切り株と想望》

10

私にとって数万の線を引きモチーフを描き出す時間は、動植物を観察し向き合う時間と同じです。そうしてできた作品が森の中に設置されると、私自身が自然と一体になったように思える一方で、決して交わりきれない人間の持つ異質さも際立って感じられます。今回は会場に生育していたアセビの切り株を中心に、この木が生きていたらという想像を膨らませ制作することで、自然と人との境界や関係性を考える作品としました。



ROKKO森の音ミュージアム



吉田甲太郎（齋藤俊文研究室） 《KOTARO YOSHIDA at ROKKO》

12

自分自身について、自分とは何かについて日々問い続けています。歩くこと、立ち止まること、観察すること、考えること……どこまでがわたしで、どこからがわたしでないのか。自問自答の中から表現は生まれてきます。



六甲高山植物園



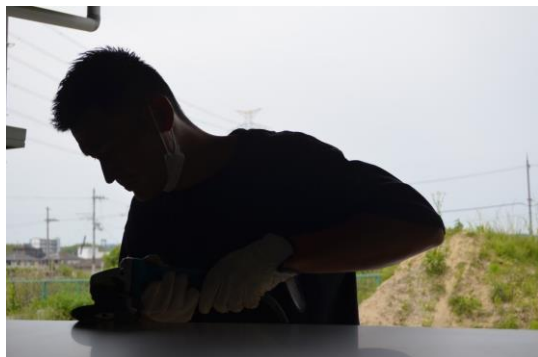
大西康明 《虚実の距離》

13

見えること、見えないもの、見えていたものや見えなくなること。それらを見ようとするかや別の何かを想像すること。絶え間なく流れている時間の中で日々同じような周期で繰り返し行われていること。凹と凸があるということ。近づくことや離れること。虚と実でもあること。それ以外の存在によってそのものがより一層くっきりとすること。それぞれの間にも距離があること。これら作品の中に起こる事象や関係性は我々が生きているこの世界や社会の在り方を示唆しています。



六甲高山植物園



上田要 《六甲の空気》

14

みえないものをみえる形で捉えたい。
この場所に辿り着いた空気で満たして。
山の営みと息吹を吹き込んで。

Striving to capture the invisible in a visible form, I fill my creations with air that has traversed the heights and carries with it the breath and spirit of the mountain.



六甲高山植物園



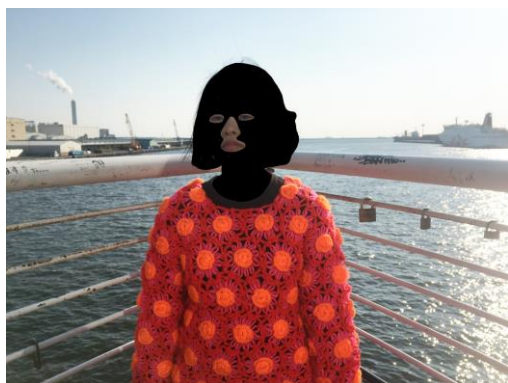
浅野暢晴 《狭間の森》

15

気がつくと、自分の知らない世界や向こう側の世界に迷い込んでしまうことが森の中では時々起こります。気づかぬうちに見えない入口を抜けて、違う世界に入ってしまったのかもしれない。この世とあの世の狭間にあるようなその場所で、トリックスター達に出会うことができるのです。狭間の森に迷い込んだら、椅子に座るトリックスター達の間に座ってみてください。椅子から立ち上がる時、少し違う自分になっているかもしれません。



六甲高山植物園



谷垣華 《自然と、ただそこに居る人たち》

16

何もしてないけど当たり前のような気持ちで、そこに堂々としていられる瞬間があること、二人でいるときの安心感と時間を共有できること、生活の中での豊かな時間と、植物の力強さと美しさ、生命力から、ただ生きていくことをテーマに制作しました。



六甲高山植物園



湯澤四 《共通祖先 -わたしたちはどこから来てどこへ行くのか-》

17

生命の起源と言われる”水”と、人間同様に真核生物である”ミドリムシ”を使用した立体作品。ミドリムシも、周囲で育つ植物も、他の鑑賞者も共通の祖先を持つ。

祖先へ想いを馳せることは、一方で、わたしたちがどのような「祖先」となれるであろうかという自問ともなる。周囲の日常的にある「ものの見え方・関り、自他の「存在」そのものを思考する。本作は、「存在とはなにか？」の問いのもと制作する。



六甲高山植物園

18

土井健史 + 江森健人

《立入禁止 これは自然か人工か》

立入禁止は、人々にその理由や背景を想像させるアートである。立入禁止の看板があると人々は五感を研ぎ澄まし、その場所やモノの情報を集める。つまり立入禁止は、場所やモノの解像度を高め顕在化するのである。植物園内に点在する立入禁止の場所やモノ、これは自然か人工か。人工とは自然に人が手を加えること、人々が作ったモノ。立入禁止を通して考えて欲しい、これは自然か人工か。自然とは人工とは何かを。



六甲高山植物園



19

マキコムズ

《マキコムズん家（ち）》

マキコムズん家は、誰でも遊びに来て、ちょっとのんびり、くすくすできる家です。家の中にも外にも作品があるので、ぜひ、マキコムズにマキこまれに来て下さい。期間中には、いくつかワークショップも予定しています。詳しくは、六甲ミーツ・アートのサイトをご覧ください。



六甲ガーデンテラスエリア



20

みょうじなまえ

《ラブリー♡マミちゃんポップアップストア
六甲ミーツアート店》

本作は作者の「かわいい」ものに対する愛着や憧れと同時に、商品や広告イメージなどを介して「当たり前日常」として私達の生活に浸透している性差別をアンビバレントに提示した作品です。何気ない日々の中に定着している物事を改めて問題として捉え直すことは、誰にとってもとても難しいことです。それらは時に愛らしいものの形をしていたり、多くの人にとって心地良いものの中にも潜んでいるのかもしれません。



六甲ガーデンテラスエリア



21

星谷モモ + 星谷マオ

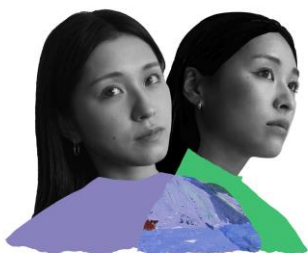
《Persian》

“耳の顔”の人々は、特定の誰かではなく、誰しもが自らと置き換え“感じる”為の表現方法、姉モモの象徴的な作風である。そこに妹マオの織を組み合わせ、写実と具象が調和する立体的な平面作品。

『二人が寄り添い持つのは一輪の花（愛情）。愛の形は人それぞれで他人には計り知れない信頼関係がそこにはあるのかもしれない。周りにどう写ろうとも、互いに相手の心に耳を傾け、想い、時に悩む姿はとても色鮮やかである。』



六甲ガーデンテラスエリア





kammy+OK! 《六甲山の乳搾り》

22

You are what you eat. 「汝は汝が食べたものそのものである」。これは西洋のことわざです。生き物は生きるために食べなければいけない。そのためにほかの命をいただいている。人間のために命を授かった家畜という命を子供達にアートを通じて知ってもらいたい。（神戸）1868年の開港以降、神戸には西洋文化がもたらされ、全国に先駆けて酪農が始まったというエピソードがあります。神戸の食文化を豊かにした原点を六甲山で感じてほしい。（岡本）



六甲ガーデンテラスエリア



松本かなこ 《温和な庭》

23

はるか遠くまで解放される場所へ進んでいく。
木に囲まれた小径をゆっくり歩く。
静かで穏やかな空気のある場所に、ふと地面に描かれた絵も目に入る。
そんな庭の雰囲気味わっていただけたらと思っています。



六甲ガーデンテラスエリア



淀川テクニック 《六甲山ムッコ グリボウ グリグリボウ》

24

スーパーで野菜を買う前にちょっと産地を気にしてみたりするのは、その野菜の取れた場所の歴史や文脈をなんとなく想像することなのだろう。

ゴミも同じで集めてみると場所によってクセがあり、その場所の文化の輪郭をなんとなく想像してしまう。
今回集めたゴミは基本的に観光産業の遺物なのだけど、それら一つ一つが今の六甲山を作り上げているんだなとしみじみ思う。



自然体感展望台 六甲枝垂れ



竹内章訓 《夢の食べ歩きツアー》

25

「六甲ミーツ・アート芸術散歩」会場内のカフェやレストランを巡り、印象的だったメニューと、アクロバットな妻の寝相を組み合わせてみました。

このシリーズは、生きる上で欠かせない寝ることと食べることを組み合わせ、日常に埋もれがちな、ユーモアや驚きを表現しています。

各作品のタイトルは、料理名か妻の寝言から付けています。
普段言われることのないそのフレーズは、私への贈り物のように感じて、書き留めています。



六甲ガーデンテラスエリア



にしかわしょう子 《Let's go★at Peace》

26

この星で、お互いが心地いい距離感を保ちつつ、平和に共生するためのプラクティス。本作品では、特定の相手をよく観察し、寄り添い、言葉以外の手段を使って異種族間にある、生活や文化の認識のズレを探る。

また、同じ空間と、時間を共に過ごす中で、感情や感覚を共有することを試みる。文化や言語の異なる相手と、この星で共に生きるにはどうすれば良いのか。

この展示に遭遇した人へ考えるきっかけになると嬉しいです。



六甲ガーデンテラスエリア



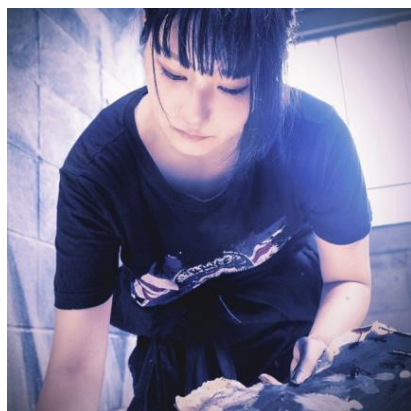
二ノ宮久里那 《Transience》

27

「Transience」は2008年から様々な環境に呼応し、人為的变化と自然的变化を共にさせ生物然と姿を変えてきた。編み地は空間の形やその造りとサイズに則って粘菌や雑草が繁殖するようにフォルムが作られ、経年や事故で敗れた箇所はかさぶたや樹木のカルスを思わせる修繕がされる。そのように編まれ、会期をとおしてゆっくり変容する。また、解けてくる糸から「変化のあと」にフォーカスした別個体も編まれ増えていく。



六甲有馬ロープウェー 六甲山頂駅



はやしだちか 《光注ぐ廃墟》

28

六甲山中にある旧摩耶観光ホテルを題材に制作しました。別名「廃墟の女王」と呼ばれる事や、朽ちていきながらも山中に佇む美しさと、コンセプトである「何色にも染まらない強さ」と重ねあわせました。現在建物内部には立ち入る事ができませんが、少しでも雰囲気を感じて貰えたらと思います。



風の教会エリア（六甲山芸術劇場・芸術センター）



大洲大作 《Rokko Loop Line - 山のあなた - 》

29

山並が車窓に広がる。ほどなく山裾が、樹々の色が間近に迫る。大阪に育った私に、六甲は街の暮らしのすぐそばで、季節の循環を教えてくれる身近な山だった。

六甲からの風、急峻に下る川と土、地熱と断層。自然の恩恵と脅威を受け止めつつ、人はふもとたもとの街に生を重ねてきた。

街には環状線が廻る。放射の線をつなぎとめ、人流とカメラを載せて、顔を失い足を切られても廻り続ける。災害や疫病や争乱のまにまに、なお果てなく続く日常。

山のあなたの空遠く、「幸（さいわひ）」住むと人のいふ。
山をめぐる季節、街につづく日常。のぞむ円環は哀しいか、美しいのか。

7



風の教会エリア（六甲山芸術劇場・芸術センター）



吉澤ハナ 《Conflicts》

30

この作品は自分の感情も含めた、人が生きることへの苦しみ、葛藤を表現しています。今の情報過多の世界では、生きていく為に必要ない情報や感じなくていい感情が多すぎて、それが私にとっては生き辛さへと繋がっています。
また、生きることへの葛藤は自分だけではなく、時代は変わっても普遍的なもので、その人だけの地獄はどこにでも、常にあると感じています。
そんな生き辛さ、痛み、矛盾、不条理などを表したのがこの作品です。



風の教会エリア（六甲山芸術劇場・芸術センター）



富井大裕 《半端な彫刻》

31

夏前に、この空間を見た。「見えるとも、見えないとも言えない状況＝半端な景色」が、この場所にはよく似合うと思った。半端な景色は不明瞭で、怪しい。洞窟・心霊スポット・深夜のビル・障子戸の穴・エトセトラ。要はミステリーだ。見たいと欲することは、人間の想像力の証明である。その造形を試みる。



風の教会エリア（六甲山芸術劇場・芸術センター）



開発好明 《未来郵便局in六甲》

32

未来郵便局はあなたの気持ちをあなた自身、あなたの家族に、お世話になったあの人にだいたい1年後に手紙を届けます。ちょっとした未来を想像しながら、あなたの気持ちを自由にお書きください。



風の教会エリア（六甲山芸術劇場・芸術センター）



園田源二郎 《まよなかの博物誌 -六甲夜話-》

33

「想像という深呼吸」
世界中が想像という深呼吸をしたならば。
深くて、大きな。
あたらしい絵が生まれ、あたらしいメロディーが流れ、
あたらしい詩が紡がれるだろう。
どこかで踊りがはじまるかもしれない。
心は震え、波立ち、風が吹き抜ける。
風は海を越え、山を越え、国境を越え。

こんなイメージを基に、想像の世界で深呼吸できるような空間を作ってみたいと思った。
ひろびろと、風通しのよい世界にこの作品をひらこう。山の自然に心身をゆだねて。

8



風の教会エリア（六甲山芸術劇場・芸術センター）



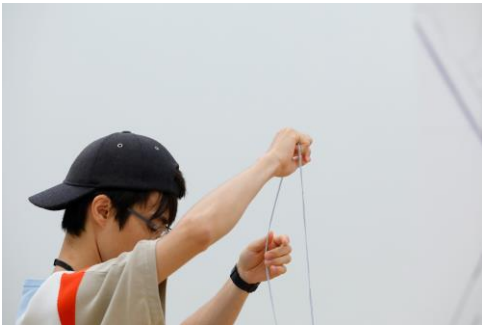
トモトシ 《私をもっと見て 2022》

34

壁面を覆う写真作品は、「関西の有名な観光名所を撮影する人たちを、観光名所目線から撮り返す」ことによって制作されています。いつもは撮られる側である名所が撮る側に反転することで、カメラを構えている一般の人たちが主役となっています。彼女/彼らは何を、どう撮ろうとしているのか、道具や仕草から想像していただけますと幸いです。



風の教会エリア（六甲山芸術劇場・芸術センター）



盛圭太 《Bug report (Tissue)》

35

糸をグルーガンで張／貼る作家独自の手法でドローイングされた作品。
展示期間中に行われた制作は六甲スカイヴィラに訪れた人々に開かれて行われた。
イメージは六甲山系全域を古代から近代にかけて織りなされた一枚の布になぞらえて描かれた。それは、自然の縦糸に人為の横糸が織り交ざる薄い布だ。布を意味するTissueには組織という意味も含まれる。一見、下図から正確に生成したかのように見える糸の組織は、その場の環境条件が与えたシステムのようなものである。



風の教会エリア（六甲山芸術劇場・芸術センター）
グランドホテル 六甲スカイヴィラ



中島和俊 《道程》

36

ゆっくりと歩みを進めると、木立から野鳥のさえずりが聞こえる。六甲の眼下に広がる眺望にあまたの人が見惚れたことだろう。だが、あの街の中にある虚無こそが現実なのだ。鉄の回廊を一つずつくぐり抜けていく。時折ほおをなでる風がなんとも心地よい。ふと立ち止まって来た道を振り返るのもいい。遠い道程で吹きつける風を読むのはたやすいことではない。ただただ前に向かって踏み込んでいくしかない。たどり着いた社で静かに祈りをささげるまで。



風の教会エリア（六甲山芸術劇場・芸術センター）



新山浩 + 神戸市立科学技術高校 《水と土の劇場》

37

リゾート地として六甲山のシンボルだった六甲オリエンタルホテルは「風の教会」を残して2007年に73年の歴史に幕をおろした。客席からは大阪方面から淡路島までを見渡し、眼下に広がる神戸の「100万ドルの夜景」を望むことができた。当時の人々の文化・レジャーに対する思いを文化施設（舞台）として再構築した。不規則な舞台のシルエットは六甲オリエンタルホテルの平面図を模している。水と緑を配することで「再びここから始まる文化の芽吹き」を表現した。



風の教会エリア（六甲山芸術劇場・芸術センター）



大巻伸嗣 《そらのあな》

38

風の教会には、小さな鐘がある。その鐘は、およそ20年鳴っていない。鐘の音を、再び鼓動させ、時空間の中に存在する過去の記憶と、まだ見えない「存在するはずのもの」をつなぐ孔をつくりだしたい。教会における鐘は、人と人をつなぐ為にその音色を響かせてきた。私はここに訪れた時、まるで時間が止まっているように感じた。長い間鳴っていなかった鐘の音を鳴らすことで、この空間が、何か別のものとつながり、生きた場所へと変容させられるのではないかと考えた。



風の教会エリア（六甲山芸術劇場・芸術センター）